

P2-007

虐待された経験があり、きょうだい間で互いに大きく影響しあっている発達障害の子どもへの看護援助の効果

相墨 生恵¹、塩飽 仁²¹東北文化学園大学 医療福祉学部看護学科、²東北大学医学部 保健学科

【目的】

父親から虐待された経験があり、きょうだい間で大きく影響しあっている発達障害の子どもに対する看護援助の有効性について検討した。

【方法】

平成22年から週に1回50分、Aさんに対し遊びを通した看護援助を開始。状態に応じて頻度を変化させながら継続して行った現在までの103回の看護援助の有効性について検討した。自身を含めきょうだい3人とも発達障がい診断を受けているが、幼少期にはAさんのみ父親から虐待を受けていた。看護外来受診の主訴は登校困難や家庭内での暴力である。本発表はAさんと姉・母親それぞれに口頭で説明し、署名にて承諾を得た。

【経過】

＜初回～71回 Aさん：小学5年～中学2年、姉：小学6年～中学3年＞看護者の前では問題行動は全く見せなかったが、自宅や学校での様子が大きな変化はなかった。誇張して話すことが多いが褒めると「私なんてどうせ・・・、お姉ちゃんの方が・・・」など自分を否定した。姉を思いやる気持ちがある反面、「恥ずかしい、姉と同じ中学には行きたくない」などの言葉もきかれた。きょうだい間のつながりが深く、姉の状態がよい時期はAさんの状態が安定せず、逆にAさんが良い状態の時には姉が落ち着かないというシーソー関係のような状態が続いた。楽しい経験を増やし安心できる場所の提供を中心に援助した。＜72回～86回 Aさん：中学3年、姉：高校1年＞姉の卒業により、日中は姉と離れる時間が大幅に増えた。学校の理解が深まりAさんを支える周囲の大人の増加によって、Aさんにとっての安心できる場所が増え、信頼できる大人が増えたことで、問題行動が格段に減少した。比較ではなく「Aさんのいいところ」に気づけるように援助した。＜87回～103回 Aさん：高校1年～2年、姉：高校2年～3年＞友人もでき、勉強も頑張っている。やってみたいということが増え、家族以外と行動する時間も増加している。暴力や暴言もほとんどなくなり、衝動的な行動はなくなっている。

【考察】

本事例は虐待され「大人への敵対心」「孤立・孤独」を強く感じていた子どもが、発達の偏りを周囲に理解されずさらに孤立し、攻撃性が暴言や暴力というカタチであらわれた。さらに姉と密接であるが故の競合や対立が高まり、シーソーの関係も顕著に見られた事例である。安全と思える環境が整ったことや自分を認められるようになったことで、姉との関係による振幅も以前ほどではなくなってきたと考えられた。

P2-008

児童虐待に携わる保健師の困難感に関する文献検討

橋本 浩子、高橋 久美

徳島大学大学院 医歯薬学研究部

【目的】

全国の児童相談所における虐待相談対応件数は増加が続いており、虐待防止は急務の課題である。支援が必要な子どもや家族が多くなっている現状において、子どもと家族に寄り添いながら継続した支援を行う保健師の果たす役割は大きく、それに伴い保健師が困難に直面することも多いと推測される。

本研究は、児童虐待に携わる保健師への支援について検討するために、これまでの文献を概観して保健師が感じる困難について明らかにすることを目的とした。

【方法】

文献検索は、医学中央雑誌Web版(Ver.5)を用いて、「児童虐待」、「小児」、「子ども」、「虐待」、「保健師」をキーワードに、2000年～2016年の原著論文を対象に行った。得られた文献115件のうち、抄録を入手できた112件についてタイトルと抄録を読み、レビュー文献、高齢者虐待に関する文献、対象が保健師ではない文献、保健師の業務の分析や研修の評価に関する文献は除いた。70件が除外となり、残りの42件について全文を読み、児童虐待に携わる保健師の困難に関して述べられていない文献を除いた。分析は文献を精読し、保健師の困難について記述されている箇所をデータとして抽出しコードとした。意味内容の類似性と相違性に着目して、コードをサブカテゴリー化、カテゴリー化した。

【結果】

12件の文献が分析対象となった。文献の年代は、2000年～2010年が8件、2011年以降が4件であった。保健師が感じる困難の内容として、「保健師としての責任」、「部署の体制」、「情報収集」、「子どもの支援」、「家族への関わり、支援」、「関係機関との連携」の6つのカテゴリーが抽出された。このうち、「家族への関わり、支援」は最も多くの文献で困難として記述されていた。保健師の経験年数は、5年以下から31年以上まで含まれていた。保健師の困難感に関連する要因について分析した文献は、1件であった。

【考察】

児童虐待に携わる保健師が感じる困難は、子どもと家族への直接的な支援に加えて、情報収集、関係機関との連携という様々な局面において生じており、保健師に求められる役割の大きさがうかがえた。対象の保健師の経験年数は幅広く、また困難感に関連する要因について分析している文献は少なかったため、今後は困難感の程度や関連する要因についてさらに検討し、保健師への支援につなげていく必要がある。

本研究はJSPS科研費JP16K12296の助成を受けて行った研究の一部である。